

んでみたがよくわかったとか、もう一つよくわからないとか、喜んだり悲しんだりする必要はない。とにかく「私は、今生も修行するし、次の生でも、その次の生でも続ける。三カルバ、修行し抜くのだ」と今生で決心してしまえばいいわけだ。そうすれば、今生は行けるところまで行けばいいことになる。

「果てしない修行」は現代人にとっても意味があるか

だが、そうした考え方は現代人にも意味があるだろうか。もし、輪廻転生がなかったら、そういう生き方をするのと損をすることになるだろうか。そうはならないし、現代人にとっても意味深い考え方だと思う。もし、死ねば人生はすべて終わりで、その先がないのなら、何をやっても大した違いはない。一所懸命生きて、自分なりに充実したと思えばいい。今生で人生が終わりか終わりでないかは確かではないが、もし終わりだとしても、その今生を自分なりに納得できる生き方ができればいいわけだ。そして、人生を修行、あるいは自己成長のチャンスだといった捉え方をして生きて死ねば、どんな状況であってもそれなりに「これでよかった」と言える人生は間違いないで送れる。

一見わかりきった古くさい説教をするようだが、ばく大な金をもうけること、高い地位につくことや、大きな名譽を得ること、あるいは好き勝手に快楽を追求することに人生をかけるのと、自分の魂を深めることにかけるのと、最終的な充実感はどちらが大きいのか、理論上は明らかなのだ。

なぜならば、人間は結局のところ心で生きているから、最後には心がどのくらい充実するかということしか残らない。まさに「唯識」である。充実とは、別の言葉で言えば、深く、大きく、広くなることだ。そして覚りとは、心が宇宙大に広く、大きく、深くなることだから、覚り以上の心の充実はありえない。そして、この身心で生きている間に、心を底の底まで深め、実は自分と宇宙が一つなのだから、この私の

生と死は宇宙の生命活動の一部なのだと思惑できたら、生きることもよし、死ぬことも悪くないという心境で死ぬるだろう。私たちの生死とは、深く目覚めれば、宇宙から生まれ、宇宙で生き、宇宙に帰ることなのである。もし、そこまで深めきれなくて、それがいちおう頭でわかったただけでも、「死ぬのは怖いけど、だがまあ宇宙に帰っていくのだから、しかたない」と思いながら死ぬるかもしれない。

こうして見ると、理論上、人生は心を深めることにかけては勝つに決まっているのだ。うそだと思つたらやつてみればいい。心を充実させるのではない、ほうに人生をかけた方はかけていただくほかに。それは、現代では幸か不幸か選択の自由のようだから。

それはともかく、人生を心を深める機会、すなわち修行の場と捉え、自分なりに菩薩の境地に入り、入つてもまだ十地という段階をずっと踏んでいき、やがては必ず究極の覚りに到るのだと決心する。覚りへの道は、ほとんど果てしなく遠いが、その道は最後の目的地にきちんとつながっている、開けている。だから、歩みきる決心さえすればいい。

だが、私たちが「自分」というものが実体であると思つているかぎり、まだ納得できないところが残るだろう。「それにしても、自分の心が深くなるのが広くなるのが、自分がいなくなつてしまえば、それも終わりで、意味ないじゃないか」と。

しかしすでに学んできたとおりの、もともと自分は実体ではない。様々なつながり・縁によって、いわばつながりの結び目として現われているのだ。しかもそのつながりもまた、静止した実体ではなくダイナミックに常に動いているものである。そうしたダイナミックな働き、つまりカルマの集積がアーヤ識であり、人間の生の源なのである。

だから、個体としての私の身心というかたちが消滅しても、私の生きたことによるカルマは——善業で

あれ悪業であれ——必ずこの宇宙に残っていく。私の生きたことは記憶として、あるいは意識的な記憶は消えても残存影響力として、よかれ悪しかれ間違いなく残り続けるのである。

何よりも、私が可能なかぎり努力したこと、修行したことは、それをそばで見えていた人に必ず影響を与える。私の生きた姿は、後に残された人々の記憶に残る。そして、その人々がよく生きようとするか、いかげんに生きようとするか、悪いことをしてもいいのだと思うかなど、間違いなく影響を及ぼすのである。

つまり私の修行のカルマは、私という個体が輪廻しないとしても、私もその一員だった「私たち人間」への、いわばスピリチュアルな遺産として遺され、受け継がれていく。実際、私たちが「撰大乘論」に出会い、学ぶことができること自体、アサンガ菩薩の瞑想と思索のお陰なのである。アサンガ菩薩のカルマは、まぎれもなく私たちの魂の榮養になっている。

だから、今生で菩薩の十段階の第一か第二までしか行けなかったとしても、個としての輪廻がないとしても、私の修行は意味のないものではないし、決してムダにはならないと断言できる。私個人がこの人生で十地を歩みきれなくても、人類が何千年、何万年、あるいは数百万年かけて、この崇高な理想に一步一步近づいていけばいい。その人類の歩みに、わずかでも貢献できればいい、と考えることができるだろう。そう捉えた時、この十地の話は、私には無理な、関心のない、関係のない話ではなく、私たち人類の一員としての私の人生にとって深い意味を持つ、人間成長の究極の目標だと見えてくるのではないだろうか。そうした視点で、以下、十地説の概要を見ていきたいと思う。

十段階の名称とその意味

第五章の冒頭に「以上のとおり、悟入の原因・結果の勝れた相について説いた。悟入の原因・結果を修得していく〔段階の〕違いはどのようなものだと知るべきであらうか」（二三九頁）と、六波羅蜜という人間成長のための方法論は述べ終わつたから、続いて成長の段階論を述べるとある。

そして「十種の菩薩の段階による。十とは何か。第一は歓喜の段階（真諦訳では歓喜地、玄奘訳では極喜地、以下同様）、第二は無垢の段階（無垢地、離垢地）、第三は明るい炎の段階（明焰地、発光地）、第四は燃焼する段階（燒燃地、焰慧地）、第五は打ち勝つことの難しい段階（難勝地、極難勝地）第六は現前する段階（現前地）、第七は遠く行く段階（遠行地）、第八は不動の段階（不動地）、第九は善い智慧の段階（善慧地）、第十は真理の雲の段階（法雲地）である」（同）と段階の名称が並べられる。

本文では、その後、なぜ十段階があるのかの理由を述べていくが、先に名称の意味について述べている部分を引用しておこう（以下二三九頁）。

最初の段階を、なぜ「歓喜」と名づけるのか。始めて自他に利益をもたらす能力を得るからである。第二の段階を、なぜ「無垢」と名づけるのか。この段階は菩薩の戒律を犯すという垢を離れているからである。

第三の段階を、なぜ「明るい炎」と名づけるのか。三昧や等至から後退することのない依りどころだからであり、大いなる真理の光の依りどころであるからである。

第四の段階を、なぜ「燃焼する」と名づけるのか。悟りを助ける法によって、一切の障害を焼き滅

ぼすからである。

第五の段階を、なぜ「打ち勝つことの難しい」と名づけるのか。真と俗との二つの智慧は相互に反するものであるが、それらの統合しにくいものを統合して対応させるからである。

第六の段階を、なぜ「現前する」と名づけるのか。十二縁起の智慧の依りどころであり、般若波羅蜜を現前させ定着させるからである。

第七の段階を、なぜ「遠く行く」と名づけるのか。効果を追求する修行の最後の段階に到るからである。

第八の段階を、なぜ「不動」と名づけるのか。一切の相や作爲的な意志で動かされることがないからである。

第九の段階を、なぜ「善い智慧」と名づけるのか。もともと勝れた滞ることのない弁舌の智慧の依りどころだからである。

第十の段階を、なぜ「真理の雲」と名づけるのか。あらゆるものを対象として一切の真理を知ることにより、一切のダーラニーの門と三昧の門を蔵しているのを雲に譬えるのである。大空のような粗い障害を覆うことができ、法身を完全に満たすことができるからである。

十段階につけられた名称のおおまかな意味は、右の引用を読んでいただけばわかると思うが、なぜ初心の菩薩から究極の仏までこうした十段階になっているのか、それが問題である。

例によってアサンガは「何のためにこうした事柄を立てて、(修行の)段階を十とすると知るべきであろうか」(二三九頁)と問題を設定しておいて、それに答えていく。それに対して加えたヴァスバンドゥの

釈（眞諦釈）を参考にしながら、私自身の解釈で解説していこう。

まず、覺りに段階があるとすると、次のような疑問が出てくる。覺りというのは完全な一体性Ⅱ全体性を覺ることであるはずなのに、それが段階に分かれるということとは、覺りにも部分的な覺りがあるということになり、そうだとするとそれは覺りではないことにはならないかという疑問である。

それに対してアサンガは、「それぞれの」段階の障害である十種の無明を対治するためである。十種の相によって明らかになる真理の世界について、十種類の無明が存在し障害となるからである」（同）と言う。確かに菩薩は第一段階で覺りの世界を完全に見るのだが、それを一度見たからといって、アーラヤ識の底に潜む無明が全部なくなるわけではない。それぞれの段階に進む前に、その障害になっている無明が十種類あり、それを一つ一つ克服していかなければ、心の奥底から完全に無明がなくなることはないといふのである。覺りは一つの世界の覺りでも、無明は十種類に分かれていて、段階的に克服していく必要があるというわけだ。

では、「何によって真理の世界の十種の相を明らかにすることができるだろうか」（同）と、また問いを立て、答えていく。

①「初めの段階では、一切に遍満しているという意味によって、真理の世界を知るべきである」（以下一四〇頁）。すべてに実体はない、無我であるという、ありのままの眞実は、個別の様々なすべての存在について完全に満ちわたっていて、その真理の世界からこぼれ出るものは何もない。一つの例外もないのだ。しかし、自分という実体があり、外側のいろいろな物という実体があるという無明・錯覚が、あらゆる存在が無我であるという事実を覆い隠している。第一の段階では、まずそういう無明が克服されなければ

ばならないという。

そして、そういう無明が自分の心の中で克服できた時、自らの悩みはすべて基本的には癒されるし、他の者の悩みを癒す力も得られる。自分だけの独りよがりではなく、「自利利他」のすばらしい歓喜が湧き起る段階Ⅱ「歓喜地」である。

②続いて、「第二段階では、最も勝れているという意味によって」、真理の世界を知るべきであるという。自分も物も空であるというのは、あらゆる存在について言えることである。そしてそれだけではなく、それを覚えることがあらゆることの中でもっとも淨らかなことであり、もっとも勝れたことである。

このことを深く瞑想・洞察すると、もはや道から外れること、戒律を破ることはなくなってしまう。あらゆる心の垢は洗われ、ぬぐい去られてしまう。「無垢地」である。

なぜよごれ・煩惱・執着といったものが出てくるかというと、執着する主体としての私というものがあり、執着されるものとしての外側の人や物があり、それが実体だと思いつ込んでいるからである。執着するから、いろいろなトラブルが起こる。「人法（ひとぽう）二空（にくう）」、人間も物もみな本来は無我なのだ、空なのだと覚ると、生き方としても煩惱が起こらなくなり、したがって、淨らかになってくるという。

正直なところ、私自身はせいぜい歓喜地の入り口の入り口のところにいるので、第二段階の無垢地はすでに想像の世界に属するのだが、幸いにして、今生でこの境地まで到達しておられると感じさせられる勝れた宗教家に何人かお会いしたことがある。そういうことから、この段階論はなかなかよくできていると感じている。

だが、魂の成長はそこで頂点に達するのではない。まだまだ、遙かな高みが待っている。

③「第三段階では、最高の流出という意味によって」、真理の世界を知るべきであるという。この部分の世親釈はきわめて感動的で、「そうか、こんな高い境地があるのか。私もそういう境地に達したいものだ」という宗教的な憧れを誘うすばらしい文章なので、味わうために、漢文書き下しで引用しておこう。

真如は一切法の中に於て最勝なり。真如を縁じて無分別智を起すに由り、無分別智は是れ真如の所流なり。此の智は諸智の中に於て最勝なり。此の智に因りて無分別智の生ずる所の大悲を流出す。此の大悲は一切の定の中に於て最勝なり。此の大悲に因りて、如来は正法を安立して衆生を救済せんと欲し、大乘十二部經を説く。此の法は是れ大悲の所流なり。此の法は一切の説の中に於て最勝なり。菩薩は此の法を得るが為に、一切の行じ難きを行じ、忍び難きを能く忍ぶ。

おおまかに訳せば、以下のようになるだろう。「ありのままの真実は、あらゆる真理の中でもっとも勝れている。そのありのままの真実を対象として無分別智が起るのだから、無分別智はありのままの真実から流れ出たものである。この智慧は様々な智慧の中でもっとも勝れている。この智慧から無分別智が生み出す大悲が流れ出す。この大悲はあらゆる禪定の中でもっとも勝れている。この大悲によって、如来は正しい教えを確立して衆生を救済することを望み、大乘の十二に分類される經典を説いたのである。この教えは大悲から流れ出たものである。この教えはあらゆる説の中でもっとも勝れている。菩薩は、この教えを得ているために、あらゆる実行しがたいことを実行し、忍びがたいことを忍ぶことができるのである」。

菩薩はここまで来ると、明るく燃え上がる炎のようなありのままの真理から流れ出す無分別智、無分別

智から流れ出す大悲、大悲から流れ出す教えにすっかりつながっていて、もはや迷うことも退くこともないという。「明焰地」である。第二段階の「無垢地」に比べて、ただ自分が淨らかになっているだけではなく、さらに究極の真理の光が大悲となって自他を照らすという、ダイナミックな働きが生まれている。

④「第四段階では、捉えられないという意味によって」、真理の世界を知るべきであるという。

この段階まで来ると、真理・覚りはもはや自分が捉え・獲得しているとか、他の人が捉え・獲得しているとか、あるいは実体としての真理・覚りが存在しているとか、一切なくなってしまう。私、あるいは他の誰かが／真理を／つかんでいる、といった思いがわずかでも残っているかぎり、それは究極の覚りではない。まだ、微妙な自他の分離意識とそれによるこだわり・無明が残っているからだという。これは、驚くほど厳しく正確な宗教的認識だと思う。

この段階では、覚りの補助になるようなあらゆる方法が徹底的に実践され、その結果、あらゆる障害が焼きつくされていく。そういう意味で「焼燃地」と呼ばれるのである。原漢文の「能く一切の障を焚滅する」という表現が、浄化の火の激しさを感じさせてくれる。

⑤「第五段階では、連続して異なることがないという意味によって」、真理の世界を知るべきであるという。

第四の焼燃地で、自分・他者・真理というものがそれぞれに分離してあるという、きわめて微妙な無明を克服したのだが、さらにまだ克服すべき無明があるという。菩薩は、ふつうの人間の分別知の世界と仏の無分別智の世界を体験しているのだが、これは相互に相反するところがある。分別知の世界では、あな

たはあなた、私は私、あれはあれ、これはこれ……とすべて分かれているから、それが本質的には一つなのだ、あるいは空なのだ、といつても、単純な論理としては一致しないし、論理上一致しないだけではない、生き方として一致させることが非常に困難である。真の世界と俗の世界の智慧の対立はなかなか克服したいものだが、それもまた無明であり、そういう打ち勝ちがたい困難に打ち勝つのが第五段階、「難勝地」である。

地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天という六道にある衆生は、生きたり死んだり、人間から天に登ったり、阿修羅から地獄までの悪い生存形態に陥ったり、命の連続に激しくかつ苦痛に満ちた変化がある。ところが、この段階に達した菩薩は、分別・凡夫の世界と無分別・仏の世界の分離がまったくなくなり、「連続して異なることがない」のである。世親の原漢文に「三世の諸仏の中に於て相続して異ならず」とあるように、過去・現在・未来のあらゆる仏と自分との完全なアイデンティティが確立した段階と言っている。こういう段階に到り着けば、もはや肉体がどうなるかが、いわゆる靈魂がどうなるかが、輪廻転生があるがなからうが、私たちの本質は永遠なのである。

私など、この第五、「難勝地」は、もう人間の達しうる究極の境地のような気がするのだが、「撰大乘論」はさらにまだ先が五段階もあると言う。省略するわけにもいかないので、紹介を続けよう。

⑥「第六段階では、汚染でも清浄でもないという意味によって、真理の世界を知るべきであるという。第五段階で、仏との連続性、完全なアイデンティティが確立された。ところが、第六段階では、それがたえずありありと現実のものになっている、現前しているという状態になるのだという。「現前地」である。

そして、真理、真如がたえず現前している状態では、もはや清浄か不浄かという対立さえない。過去・現在・未来の仏と一体化した時、本来的に清浄なのだから、不浄な状態から清浄な状態に変化することもなくなる。汚れるということがあるから、浄らかになるということもあるが、実は本来浄らかであるという事は、清浄さと不浄さの分離・対立を超えているということである。第二段階「無垢地」では、まだ汚れが否定されて、浄らかさだけになるわけだが、それがさらに徹底されると、もはや汚れもなければ浄らかさもない。

⑦「第七段階では、種々の教えも別々ではないという意味によって、真理の世界を知るべきであるという。

この段階は「遠行地」と呼ばれている。修行し、覚ることによって、何かの功德・効用を求めるといふ気持ちが残る最後の段階、ためにする修行によって到るもつとも遠いところである。ここまで達すると、仏教の教えが実に多様に分かれていて、一見対立・矛盾するものさえあるように見えていたのが、「一味の修行、一味の通達、一味の至得に由るが故に、異り有ることを見ず」とあるように、根元的には同じ修行、同じ覚りへの到達、同じ真理の獲得から出ていると理解できるようになる。修行の遙かな遙かな到達点、まさに「遠行地」である。

⑧「第八段階では、増減することがないという意味によって、真理の世界を知るべきであるという。

第八段階は「不動地」と名づけられている。一切の、あれがいいこれが悪い、大きい小さい、高い低い、うれしい悲しい、白い黒いといった一切の相を離れており、だから、いいものを得たいとか、悪いものは

遠ざけたいとか、楽しいことは続けたいといった思いはもちろん、覚りに関してさえ覚りたいといった気持ちに動かされることのない段階である。

本心に覚ると、覚ったからといって何かが増えるわけでもなければ、迷っているからといって何かが減るわけでもない、ということがよくわかって、まさにこの世界、このありのまま、そのままで真如だとわかる。

しかし「不動」といっても、ただ静止しているということではない。「此の無分別の心は自然に相續して恒に流るるが故に不動と称す」と言われている。いわば全宇宙と一体になった心は、もう他の何かによって動かされることはありえない。しかし単に止まっているわけではなく、ただ自ら永遠に動き、働き続けるのである。

そして心がそこまで宇宙と一体化したならば、私のしたいことは宇宙のしたいことであり、宇宙のしたいことが私のしたいことになるから、したいことはすべて自由自在に実現するという。思ったような形になるという意味で「相自在」と言われている。これは、自分と外界、宇宙が分離しているという常識からは信じられない話である。また、分離した個人の心がすべてを思いどおりにできるといふのであれば、それは思い上がった錯覚の超能力としか言えない。だが、ここで言っているのはそういうことではない。

さらに「土自在」といって、もし菩薩が増えることも減ることもない無分別の世界を覚った上で、なお大悲の故に分別の願を起こして、例えばこの土が水晶のような透明な土地になって欲しいと思えば、その土地、その国土はそうなるという。

そうした「相自在」は仏法を成熟・完成させるためであり、「土自在」は衆生を成熟・完成させるため

だという。仏の真理を成熟・実現させ、国土というか、衆生の住む場所を自由自在に変えていくのは、衆生、生きとし生けるものを成熟させるためである。第八地に達した菩薩は、そのために「土自在」といういわば神通力を使うことができるのだという。

さて、ここでもう一度思い出しておこう。これは、百年や千年というタイム・スケールの話ではない。最初の歓喜地から第六の現前地まで一カルバ、第七の遠行地と第八の不動地でもう一カルバ、そしてこの第八の不動地から第十の法雲地までさらに一カルバかけて、実現していくという話なのである。

こういう考え方を採った時、私たちは人類が五千年やそこらで平和な極楽のような世界を創り出しえないからといって、驚くことも、絶望することもなくなる。人間の蓄えてきた悪しきカルマは、そのくらい深く重い。しかし、三カルバかけて、善いカルマ、覚りのカルマを蓄えれば、世界は光輝く世界に変わらう、ということなのだ。

だが、そうなったからといって何かが増えるわけでもなければ、迷っているからといって何かが減るわけでもない。世界が極楽のように平和で楽しい所になったからといって何かが増えるわけでもないし、みんなが憎み合い殺し合っているからといって何かが減っているわけでもない。ヒューマニズムでは、そんなことは認められないかもしれないが、存在のいちばん深いところではそう言うほかない。

だから、世界がどうなるかが、人類がどうなるかが、どうでもいいということもあるのだが、しかし智慧から自然に生まれてくる大悲があるので、やはり菩薩は世界・土を変えるべく願いを起こし、働き続けるのである。

⑨「第九段階では、相の自由さの依りどころという意味によって、国土が自由であるという意味によつ

て、智慧が自由であるという意味によって、真理の世界を知るべきであるという。

第九の段階は、善い智慧の段階、「善慧地」と呼ばれている。すでに第八地で、瞑想が自由自在になり、ものの姿を自由自在に見、変えることができる。神通力がついて、住む場所についても、土自在になる。第九段階ではそれに加えて、深い本当の智慧を自由自在にできる。善い智慧を自分も本当によくわかっているから、自由自在にあらゆる説き方を駆使して、他の人に伝えることができる。「もつとも勝れた滞ることのない弁舌の智慧の依りどころだからである」という。

この個所について深く考えさせられるのは、大乘の人々、特にここではアサンガやヴァスバンドゥたちは、あらゆる人に当てはまるはずの真理でありながら、それを具体的なそれぞれの人々に伝えることは至難の業であることに実によく気づいていたということである。菩薩と衆生の共通の依りどころである宇宙・仏とのつながり、一体性という事実を、目覚め・気づきとして共有することができるように、コミュニケーションする能力は、菩薩のほとんど最終に近い段階まで成熟しなければ身につかない。つまり、そういう真理を伝達する能力の不足をも、瑜伽師たちは「無明」と捉えていた。本当に「善い智慧」とは、生きとし生けるものすべてとコミュニケーションする能力のことだということなのである。

⑩「第十段階では、カルマの自由さの依りどころという意味によって、ダーラニーと三昧の門の自由さの依りどころという意味によって、真理の世界を知るべきである」という。

最後の第十段階は、「真理の雲」と訳したが、「法雲地」である。要するに、雲は、自らの中に命すべてをはぐくむ水を蓄えていて、いつでも雨を降らせて、生き物を養うことができる。それから、すべての汚いもの、煩惱をまったく完全に覆いつくしてしまうことができる。それが、「真理の雲」という表現の意

味である。

それができるのは、身体、言葉、心のすべて（身口意）の行為・カルマについて、自由自在だからである。また、真理が要約された経典の句のようなものを「ダーラニー（陀羅尼）」といい、瞑想を「三摩提」あるいは「三昧」というが、それらを自由に駆使することができる。そして、真理の世界に通暁、通達しきって、すべての生き物に真理の雨を降らせて潤すのだという。

ヴァスバンドゥは注釈して、「法界に通達するは、衆生を利益することを作さんが為なり」と言っている。大乘の菩薩はなぜここまで「行じ難きを行じ忍び難きを能く忍」んでまで、十地を歩みつくそうとするのか。真理を知りつくそうとするのか。それは、「衆生を利益することを作さんが為」なのだ。なんと恐るべく高い理想だろう。凡夫は、ほんのちょっと苦勞させられても、「なんでおれがひとのためにこんな苦勞をしなければならぬんだ」と不平たらたらだが、菩薩は、衆生は実は私なのだという境地に達しているから、衆生のためは私のためなのだ。まったく何ものにも動揺させられない不動の心を持っていないから、しかも自然に働かずにはいられない。そして、真理を生きとし生けるものすべてに完全に伝える能力を身につけるまでは、本当に無明を超えた、覚った、智慧を得た、修行が完成したとは思わないのである。

十段階の構造

これで、十地というものの構造がわかっていただけだと思うが、まとめてみよう。まず何よりも覚って喜ぶのが第一段階だが、その場合も「自利利他」の喜びなのである。そして消々しく浄らかになり、すばらしい神通力を身につけるが、さらに浄いも浄くないもない、増えるも増えないもないところまで

行くわけだ。それで、そこまで行けば究極かというところ、そうではなく、もう一度衆生を教えるための善き智慧、衆生を育むために真理の雨を降らせることのできるような豊かな雲のような存在にまで自分が高まり、深まっていつてはじめて、菩薩として十地を歩みきったと言えるのだという。その十地を歩みきって、その先にいよいよ仏の境地になる。つまり、十地のその先がまだあるということであり、実は靈性の成長に限界はないということなのだ。

これは、想像しただけでも大変なことだ。もしこれが瑜伽師たちの想像だとすると、よくもここまで想像したものだと驚嘆してしまふ。しかし、これは決してただ想像しただけのことではないとはっきりわかるのは、「無染無淨」、汚れも浄らかさもない、「不増不減」、増えるも減るもないといった言葉である。こうした言葉で示されている事柄は、何の体験もなしに思いつけるようなものではない。何らかの体験があったからこそ、常識を超えた言葉を語らざるをえなかったのだと思われる。そして、その体験を基に、さらなる人間の可能性を先取的に予感したのではないだろうか。あまりにも高すぎるかのように見える大乘唯識の人間成長のイメージを、私はそういうふうに読んでゐる。

五位説と十地説の関係

最後に補足的に、「撰大乘論」の十地説と「成唯識論」の五位説の関係を述べておこう。

五位説の最初の二段階は、覚り（菩提）を求める存在、つまり菩薩になった段階ではあるのだが、まだ覚りの片鱗さえ体験していないので、凡夫性を超えていない。「凡夫の菩薩」と言われるような段階である。覚りを得るために必要なもの・資糧を得るといふ第一段階、「資糧位」、それから、行を加えていく第二段階、「加行位」である。

そして、第三段階の「通達位」で覚りの世界に到達するわけだが、これが十地の第一段階、「歓喜地」に重なっている。しかし、歓喜地のほうが通達位よりももう少し先の段階まで含んでいる。

そして第四段階の「修習位」は、十地の第二段階「離垢地」から第十段階「法雲地」まで全体を含んでいる。

菩薩の十地が終わると、いよいよ仏の境地、あるいはそのわずか一歩手前ということになっている。「究竟位」になる。

歴史的に言えば、十地説が先にあり、五位説のほうが後から、その簡略化といった感じが出てきているようだ。私も、五位説のほうがシンプルでわかりやすいので、唯識の概説をする時には、五位説を使っているが、先に見たとおり、十地説にもまた別の意味・味わいがあると言えるだろう。

いずれにせよ、唯識・瑜伽行派の人々は、現代の私たちには信じがたいほどの高みまで人間は成長する——ただし信じがたいほどの時間をかけて修行し続ければ——と考えていたのである。

第六章 菩薩の三つの学び 戒・定・慧の三学とは何か

第五章で、菩薩の段階について述べた後、アサンガは、もう一度実践の問題に帰り、第六、七、八章ですでに述べられた唯識観や六波羅蜜と重なる、持戒、禪定、智慧について、大乘が小乗に比べてどこが勝れているのかを明らかにしていく。

これは伝統的には「戒・定・慧の三学」と呼ばれていて、菩薩の学ぶべき三つの基本的な事柄とされていることと、かなり簡略に述べられていて各章のボリュームが少ないので、ここでは一章にまとめてポイントを述べていこう（したがって、本章以降は「撰大乘論」と本書の章数は一致しなくなる）。

一 菩薩の實行すべき戒律

まず第六章は、「戒律による学の勝れた相」だが、「略して脱けば、四種類の違いがある。（それによって）菩薩の戒律に違いがあることを知るべきである。何が四であるか。第一は種類の違い、第二は共に学